シラバス参照

タイトル「**2024年度危機管理学部(公開用)**」、フォルダ「**実務経験のある教員による科目**」
シラバスの詳細は以下となります。

戻る

科目ナンバー	RMGT/SSCS1138		
科目名	経済学２		
担当教員	永瀬　雄一		
対象学年	1年,2年,3年,4年	開講学期	後期
曜日・時限	月１		
講義室	1205	単位区分	選
授業形態	講義	単位数	2
科目大分類	総合教育		
科目中分類	総合基礎		
科目小分類	文化教養		
科目の位置付け（開発能力）	■ＤＰコード-学修のゴールを示すディプロマポリシーとの関連 DP1-D〔市民的素養・市民的教養〕市民的素養と参加コミュニティに積極的な変化をもたらすために、知識・スキル・価値観・動機を動員することができる。 DP4-I〔理解力・分析力〕文章表現、数値データを適切に扱いつつ、情報の収集と取捨選択、分析と加工を有効かつ円滑に行い、課題の解決につなげることができる。 DP7-C〔他者理解・倫理観・公共心〕人間の行動の正誤に関する推論に正面から取り組み、社会的な存在としての自己の行動原理を獲得することができる。 ■ＣＲコード-学修を通じて開発するマインドセット・ナレッジ・スキルを示すコモンルーブリック（ＣＲ）との関連 D1　市民的素養と参加（20%） C1　倫理的思考・社会認識（20%） Ｉ1　理解・分析と読解 (20%) Ｉ2　量的分析（20%） Ｉ3　情報分析（20%）		
教員の実務経験	2007年から、交通経済・経営の専門シンクタンクである(一財)交通経済研究所で研究員として、地域公共交通や海外における都市間交通等に関する調査・研究を行ってきました。これらの経験をもとに、経済学の講義を展開します。(第4、11，12回)		
成績ターゲット区分	■成績ターゲット　能力開発目標ステージとの対応 ２　進行期　～　３　発展期		
科目概要・キーワード	国民所得決定理論などのマクロ経済学の基礎理論を理解し、失業、インフレ、経済不況など現実経済が抱える諸問題に対する経済政策の有効性を学ぶことを目標にします。具体的には、短期の経済変動の理論を中心にマクロ経済学の標準的な体系を理解し、近年の日本経済について、経済学のロジックを踏まえて論じることができ、その政策対応や個別論点の理解が目標となります。授業形態は（講義・実技・実習・演習）形式により行います。なお、対応するコンピテンスに基づき効果的な授業方法として、又は各授業を補完・代替するためオンライン授業を一部取り入れる場合があります。 ■キーワード：マクロ経済学、経済成長、失業、景気変動		
授業の趣旨	■副題 マクロ経済学の考え方を習得し、社会における経済現象の理解と予測ができる社会人になりましょう。 ■授業の目的 様々な経済現象が起きる現代社会において、国全体の経済の動きを特定の指標によって捉え、景気や経済成長について把握し、その変動の諸要因を理解することは、私たちが社会で生		

	活していくうえで問題の理解や解決のための多くのヒントを与える要素となります。本講義では、マクロ経済学の基礎的な理解を通じて、様々な経済現象の解決方法を学習します。 ■授業のポイント 現代社会で起こる経済現象はより複雑化しています。前半の講義では、経済学の基礎的概念を理解した上で，マクロ経済学を考える上で特に重要な事項について解説します。その上で、経済成長，失業、金融システム、景気変動といった具体的なマクロ経済問題について解説します。講義を通じて，文化的素養，市民的教養として経済社会の構造を理解するとともに、経済情報の理解・分析を通じて、市民参加への応用を図ります。
総合到達目標	■日本及び国際的な経済活動の構造を理解できるようになるために、以下のことを学習し、修得する。 ・経済学の基礎的な概念を理解し、日常生活の行動に応用できるようになる。（第1～4回) ・マクロ経済政策の目標となる国民経済計算について理解できるようになる。（第5回~7回) ・経済成長，貧困問題、失業問題などの具体的な課題を、マクロ経済理論をもとに説明できるようになる。（第8回～12回） ・金融政策を中心に、景気変動が発生した時にどのように政策が有効か、分析できる。（第13回～15回）
成績評価方法	■リアクションペーパー（30%）：適用ルーブリック D1・C1 （評価の観点）講義への参加意識の濃度をリアクションペーパーよって評価します。 （フィードバックの方法）次の講義にて、補足的な解説をします。 ■学期期間中におけるレポート（70%）：適用ルーブリック I1・I2・I3（評価の観点） 各単において最も重要な点について問い，理解度を評価します。 （フィードバックの方法）レポート配布の次の講義にて、ポイントを解説します。
履修条件	特にありません。
履修上の注意点	マクロ経済学は経済社会で生活する私たちにとって極めて重要なものです。受講に先立ち、国全体の経済の動きはどのような指標によって捉えられるのか、国内では景気の良し悪しについてなぜ見方が分かれるのか、考えてみましょう。

授業内容

回	内容
1	①授業テーマ ガイダンス（全体テーマ、授業の進め方、成績評価方法の告知）、導入、単元の概要紹介 ②授業概要 授業の概要・目的・到達目標および授業の方法、評価規準について説明します。とりわけ、スポーツ科学部の専門領域おける経済学の位置づけを担当教員の実務経験を交えながら解説します（D1・C1）。 ③予習(120分) 指定された教科書の全体像をつかむ。 ④復習(120分) 経済学を学習することの意義を整理する。
2	①授業テーマ 経済学の原理と実践 ②授業概要 科学的な分析方法とはどのようなものであるのか、経済学が科学の一部であるのはどうしてか、といった基礎的な概念と原理を解説します（I1）。 ③予習(120分) 経済学とはどのような学問かを整理する。 ④復習(120分) 経済学の原理について整理する。
3	①授業テーマ 経済学の方法と問い ②授業概要 経済学の最も基礎的な概念となる市場の機能を，モデルと合わせて基礎的概念とともに学ぶ（I1）。特に，経済モデルとデータを用いた検証方法について解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 経済モデルとデータとの関係を整理する。 ④復習(120分) 科学的分析とは何か、という問いに対する解を整理する。
4	①授業テーマ 最適化：最善を尽くす ②授業概要

	経済主体が実現可能な最善の選択肢を選ぶことを、最適化と呼ぶが、そのような最適化がどのようなメカニズムを通じて達成されているのかを事例を挙げて解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 最適化の方法には、どのような方法があるのかを調べる。 ④復習(120分) レポート作成を通じて限界分析の概要を事例とともに整理する。
5	①授業テーマ 国の富：マクロ経済全体を定義して測定する ②授業概要 マクロ経済学とは、経済全体の活動を研究する学問である。国民経済計算とは、経済の総産出量である国内総生産（GDP）を算出するための枠組みであり、3つ側面から測定できる。本講義では、経済全体の動きを「生産=支出=所得」の側面から測定ができることを理解し、GDPと国民の幸福とどのように関連するのかを解説します（I1・I3）。なお、講義の後半では、レポート課題を出し、その作成に一部の時間を充てる。 ③予習(120分) GDPが、どうして「生産＝文出＝所得」として計算されるのかを理解する。 ④復習(120分) 戦後日本のGDP推移を調べ、日本がどのように豊かになってきたのかを整理する。
6	①授業テーマ 総所得（1） ②授業概要 1人当たりGDPの格差については、労働者1人当たりの物的資本および人的資本の違いによって生み出される格差もあるが、技術の違いと生産の効率性の違いがもたらす格差のほうがより重要である。本講義では、一人当たりGDPの各国の格差に与えている技術の役割と決定要因を中心として解説します（I1・I3）。なお、講義の後半では、レポート課題を出し、その作成に一部の時間を充てる。 ③予習(120分) 生産要素とGDPの関係を調べる。 ④復習(120分) 最近の主要国の一人あたりGDPの違いを調べたうえで、その違いがどのように人々の幸福に影響をもたらしているのかを整理する。
7	①授業テーマ 総所得（2） ②授業概要 1人当たりGDPの格差については、労働者1人当たりの物的資本および人的資本の違いによって生み出される格差もあるが、技術の違いと生産の効率性の違いがもたらす格差のほうがより重要である。本講義では、一人当たりGDPの各国の格差に与えている技術の役割と決定要因を中心として解説します（I1・I3）。なお、講義の後半では、レポート課題を出し、その作成に一部の時間を充てる。 ③予習(120分) 生産関数と技術との関係を調べる。 ④復習(120分) 一国のGDPと、労働の総効率単位、物的資本ストック、技術および生産の効率性との関係を整理する。
8	①授業テーマ 経済成長（1） ②授業概要 経済成長は、1人当たり（実質）GDPがどれだけ成長したかによって決まる。多くの国々で1人当たりGDPが高くなっているのは過去の経済成長の結果であり，持続的成長は技術進歩によってもたらされてきた。本講義では、経済成長の測定方法とそのパターンについて解説します （I1・I2）。 ③予習(120分) 主要国の過去50年間の経済成長率を調べる。 ④復習(120分) 戦後日本の経済成長率を調べて、高い経済成長率を実現した各時期において、どのパターンに該当するのかを整理する。
9	①授業テーマ 経済成長（2） ②授業概要 経済成長は、1人当たり（実質）GDPがどれだけ成長したかによって決まる。多くの国々で1人当たりGDPが高くなっているのは過去の経済成長の結果であり，持続的成長は技術進歩によってもたらされてきた。本講義では、経済成長の測定方法とそのパター

	ンについて解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 絶対的貧困に伴う問題について、教科書およびそれ以外の情報源をもとに調べる。 ④復習(120分) どうすれば貧困を減らすことができるのか、自分の意見を整理する。
10	①授業テーマ なぜ豊かな国と貧しい国があるのか？ ②授業概要 繁栄の直接的原因とは、一国の繁栄や貧困を、投入量に関連づけるものである。繁栄の根本的原因とは、投入量に差がある理由を探るものである。繁栄の根本的原因の仮説には、地理・文化・制度からの3つのアプローチがある。本講義では、「なぜ豊かな国と貧しい国があるのか？」という大きなテーマについて、講義と場合によってはグループワークを通じて明らかにしていきます（I1・I2）。 ③予習(120分) 世界でもっとも繁栄している国と貧しい国について調べる。 ④復習(120分) どのような政策が、世界の貧困の解決策となるのかを整理する。
11	①授業テーマ 雇用と失業（1） ②授業概要 潜在的労働力である16歳以上人口は、就業者・失業者・非労働力人口の3グループに分類される。雇用水準と賃金水準は、企業の労働需要と労働者の労働供給と様々な賃金の硬直性で決まる。本講義では、競争的労働市場の均衡条件について具体的に事例を交えて解説します （I1・I2）。 ③予習(120分) 日本の失業率の推移ついて調べる。 ④復習(120分) 競争的労働市場の均衡条件を踏まえて、失業が発生するメカニズムについて整理する。
12	①授業テーマ 雇用と失業（2） ②授業概要 潜在的労働力である16歳以上人口は、就業者・失業者・非労働力人口の3グループに分類される。雇用水準と賃金水準は、企業の労働需要と労働者の労働供給と様々な賃金の硬直性で決まる。本講義では、労働市場が持つ非効率性と失業との関係を、具体的に事例を交えて解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 摩擦的失業とは何かを、教科書をもとに調べる。 ④復習(120分) 失業率を低下させるためには、どのような取り組みが必要か、その発生メカニズムを踏まえて整理する。
13	①授業テーマ クレジット市場 ②授業概要 クレジット市場は借り手（言用需要者）と預金者（言用供給者）をマッチングさせ、クレジット市場の均衡で実質金利が決まる。銀行とその他の金融仲介機関は、（1）利益につながる融資機会を見つけ出す，（2）短期の資金を活用して長期投資を行う，（3）リスクの量と分散を管理する、という3つの重要な機能を持つ。本講義では、銀行と金融仲介機関の機能を、具体的な事例を交えて貿易の利益を解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 銀行はどのような業務を行っているのか？について調べる。 ④復習(120分) 銀行は、経済において3つの重要な役割を担う。その3つの機能ついて整理する。
14	①授業テーマ 金融システム ②授業概要 貨幣には3つの役割がある。交換手段、価値貯蔵手段、計算単位である。貨幣数量説では、マネーサプライ，流通速度，価格、実質GDPの関係が示されている。また、貨幣数量説では、インフレ率は、マネーサプライの成長率から実質GDPの成長率を差し引いたものと等しくなると予測する。本講義では、中央銀行の役割を中心に、具体的な事例を交えて解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 貨幣の機能と中央銀行の役割について調べる。

		④復習(120分) 　日本銀行の役割と、日本の金融政策の課題について、自分の意見を整理する。
	15	①授業テーマ 　景気変動 ②授業概要 　景気変動には、共変動、予測の難しさ、経済成長の持続性、という3つの重要な特徴がある。景気変動は、技術変化、景況感の変化、および貨幣的要因と金融的要因，が原因となって発生する。本講義では、過去に発生した不況の原因と回復のメカニズムについて解説します（I1・I2）。 ③予習(120分) 　過去に発生した不況について調べる。 ④復習(120分) 　リーマン・ショックと呼ばれる2007～09年の深刻な景気後退について、その原因を整理する。
関連科目	RMGT/SSCS1137「経済学1」はミクロ視点での経済学の基礎知識として補完的な関係にあります。	
教科書	アセモグル・レイブソン・リスト『ALL入門経済学』東洋経済新報社	
参考書・参考ＵＲＬ	アセモグル・レイブソン・リスト『ALLマクロ経済学』東洋経済新報社	
連絡先・オフィスアワー	■連絡先：開催時に告知します。 ■オフィスアワー：	
研究比率		

戻る

Copyright (c) 2016 NTT DATA KYUSHU CORPORATION. All Rights Reserved.